

ここは  
三千世界のかたすみ。  
今から九百年ほどむかしの  
日本の美作国、  
今の岡山県の北の地方のこと。

世は、平安から鎌倉に  
移り変わるうとするころ。  
戦ばかりがつづき、  
大きな地震にも見舞われた、  
みだれた時代のことです。

ある武士の家に  
ひとりの赤子が生まれ、  
勢至丸と名づけられました。



勢至丸、あーそーぼう。  
戦いごししょう！

勢至丸は、  
かしこくやさしく

そだっておりました。

お父さんとお母さんは、

「武士は人とあらそって、

命をうばったり、うばわれたりする。

この子は、お坊さまになって

勉強の道に進むのがよいだろう」と

と考えたのでいます。

いーかーない。  
いま本を読んで  
いるから。





この時代の学問といえば、  
お釈迦さまの教え「仏教」を学びたい。  
比叡山は、その中心だったのでいきます。

勢至丸は、  
京の都に近い比叡山に入ることになりました。  
比叡山にはお寺がたくさんあり、  
お経もいろいろおさめられています。



「これほどに、  
学びたい気持ち強いとは！  
こんな子は見ることがない。  
もっとよい修行ができる寺に  
いかせたいものだ」

勢至丸は、宝ものを見つけたかのように、  
すぐにお寺にあるお経を  
読みつくしました。  
「おじ上、わたしはもっともっと、  
仏さまの教えを知りたいです」

そこで、勢至丸が十歳をむかえるころ、  
おじである勧覚和尚のいる寺に  
あずけられることになりました。  
当時、武士の家の長男が寺に入ることは、  
とてもめずらしいことでした。



比叡山では、  
 たくさんのお坊さんが、  
 世の中をよくしようと  
 仏教の教えを研究し、  
 きびしい修行を積んでいます。  
 勢至丸も一生けんめい修行し、  
 出家して、「法然」という  
 名前をもらいました。

法然さんのかしこさは、  
 すぐにみなに知られ、  
 「智慧第一の法然」  
 と、うわさされるようになりました。  
 でも法然さんは、うれしくありません。

「毎日、多くのことを学んでいるけれど、  
 わたしの知りたい教えとは、  
 なんだかちがうような……」  
 法然さんは、いつも  
 遠くから、なにかによぼれているような  
 心持ちがしてならないのです。

ある日、  
悲しい知らせが  
とどきました。

戦で受けた傷がもとで  
お父さんが死んでしまい、

お母さんも、あとを追うように  
なくなりましたというのです。

法然さんは涙します。  
「父上、母上とはもう会えないんだ……」

人は死んだあと、  
生きていたところの行いによって、  
六つの世界のいずれかに生まれ変わる  
「輪廻転生」をするのだといいます。

生きものを殺したり、  
人のものを盗んだり、  
うそをついたりした人が  
生まれ変わるのは  
地獄の世界。  
とてもとても長い時間、  
苦しみつづけなければ  
なりません。



欲ばりで  
人のことをねたむような人は、  
餓鬼の世界に  
生まれ変わります。  
食べたとしても食べられず、  
飲みたくても飲めず、  
飢えに苦しむ世界です。



欲望のままに生きて、  
おろかなふるまいをする人は、  
畜生の世界に生まれます。  
いつも、自分より強いものに  
食べられてしまわないか、  
おびえながら生きなければ  
なりません。

# 読み解き「そのとき門はひらかれた」



## 苦や悔……

わたしたちの苦しみ「苦」とはなんでしょう。それは、心にかかえる「煩惱」です。大陽日の「除夜の鐘」は百八つある煩惱の数だけつくって聞いたことがあるでしょう。人はそれだけ欲があるものなんです。わたしたちを苦しめる煩惱のなかでも、その大もととなるものを「三毒」といいます。

「一」目の毒は「貪欲」、むさぼりの心です。「二」目の毒は「瞋恚」、怒りの心。「三」目の毒は「愚痴」、本當のことがわからないことです。



絵本のなかで、法然さんは亡くなつた両親の行く末を思い「六道輪廻」について考えます。輪廻にとらわれている間は、どれだけ修行しても、苦をなくすことはむずかしいのです。天の世界でさえ欲からは離れられず、苦からも逃れられません。

## 阿弥陀さま

お釈迦さまの教えは「八万四千もある」とたとえられるほどたくさんあります。そのなかには、お釈迦さま以外の仏さまも登場します。どの仏さまも苦から解放される方法を説いていて、阿弥陀さまもそのような仏さまです。

輪廻転生から逃れるには、仏さまになるための修行はとてもむずかしいのです。そこで阿弥陀さまは、苦のない極楽浄土を、わたしたちの須弥山世界のある三千世界を超えたはるか遠く、太陽のしずむ方向につくりました。極楽浄土でなら、阿弥陀さまの教えを聞いて、だれもがさとり、仏さまになれるといえます。

阿弥陀さまは、すべての人が極楽浄土に生まれることができるならば、仏にならないという願いを立てました。はじめの一人が、極楽浄土に生まれたことで、阿弥陀さまは仏さまとなったのです。

法然さんがひらいた浄土宗では「お釈迦さまがいちばようにお釈迦さまから聞きました」という言葉ではじまります。法然さんが教えに気づいたきつかけもお経からでした。

## 法然さんの気づき



三十年も探し続けたある日、法然さんの目は、中国、唐時代の高僧、善導大師の『観経疏』という書物の一節に吸い寄せられました。

そこには「上来難説定散阿門之益、望仏本願、意在衆生一向専称弥陀仏名」(お釈迦さまはたくさんの方を説かされてきたけれども、阿弥陀さまの願いは何かと考えると、その真意は、ただだだ生きとし生けるものに阿弥陀さまの名をとなえさせることにあるのだ)と書かれていました。

「観経疏」は、古代インドの王妃、韋提希が登場する『観無量寿経』というお経を解説したものです。自分の力で「三毒」をどうすることもできず、苦しみ嘆いてばかりの韋提希が、お釈迦さまの導きをたよりに、阿弥陀さまに救われるお話です。このときお釈迦さまが示したのが、阿弥陀さまの名前をとなえる念仏でした。

## 南無阿弥陀仏とは

「南無」とは「深く敬う」こと。「南無阿弥陀仏」には、「わたしのすべてを阿弥陀さまにお任せします」という意味がこめられています。



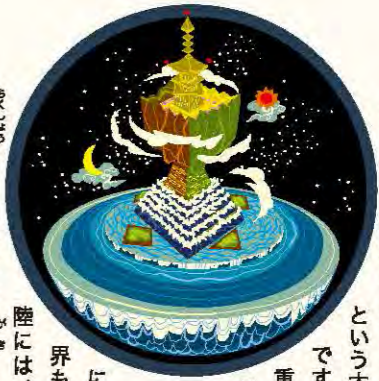
阿弥陀さまは、苦しんでいる人たちに「いつも見守っているから、必ず救うから、安心して生きていんだよ」と願ってくれています。そんな仏さまがいることを知って「ありがたい、うれしい」という気もちがあふれ、となえるのが「南無阿弥陀仏」です。

法然さんの時代、すでに「南無阿弥陀仏」となえる人も多くいました。しかしそれは、何万回もとなえる修行であつたり、おまじないとなえたりするものでした。法然さんは、厳しい修行をしなくても誰もが救われる教えとして「南無阿弥陀仏」を伝えたのです。

## この絵本のほじくり

この絵本のはじまりには、三千世界という、無限の広がりをもつ世界観が出てきます。「宇宙」と表現しています。が、仏教では「虚空」といいます。

はてしない虚空に無数にうかんできているのは、「須弥山」という大きな山を中心とした世界です。須弥山のまわりには七重の山脈が連なり、その外側は海で、東西南北に一つずつ四つの大陸がうかんできています。



13ページから16ページに出てくる「六道輪廻」の世界もここにありまます。南の大陸には、わたしたち人間や動物(畜生)がすみ、地下には餓鬼の世界があり、さらにその下に地獄があります。須弥山とその上空には、修羅の世界や天の世界があります。

この須弥山世界が千個集まった小千世界、小千世界が千個集まった中千世界、中千世界が千個集まった三千大千世界(三千世界)と世界は大きく広がって、虚空のあらゆる方向にさらばつているというのが仏教の世界観です。

## お釈迦さまをはじめた仏教

仏教は、今から二千六百年ほど前、現在のネパールのルンビニという場所に生まれたお釈迦さま(ゴータマ・シッダルタ)の教えです。お釈迦さまが「この世は苦しみである」と気づいたことははじまりです。

「苦」とはなにかな、「苦」からぬけるにはどうしたらいいのか、「苦」がなくなればどうなるのか、こつしたことを伝えるのが仏教です。



ん伝えたかったのは阿弥陀さまの教え」と考えます。

お釈迦さまは、苦しみに満ちたこの世から、苦しみのない「極楽浄土」へと送ってくれる仏さま。阿弥陀さまは極楽から迎えにきてくれる仏さまです。



わたしたちが命を終えるとき、阿弥陀さまは左側に観世音菩薩、右側に勢至菩薩をしたがえて迎えにきてくれます。観世音菩薩は阿弥陀さまの慈悲を、勢至菩薩は智慧をあらわします。絵本の最初で、赤ちゃんの法然さんを送りだしていたのは、勢至菩薩です。

## 悩み、悩む法然さん



法然さんが生まれたのは長承二年(一一三三)。このころ日本では、お釈迦さまが入滅して(亡くなって)二千年経った「末法の世」だといわれていました。戦が続く、飢饉や大火、大地震などの天変地異に見舞われたことも重なり、お釈迦さまの教えが正しく伝わらず、やがて仏教も廃れてしまつと考えられていたのです。当時の人々にとって、仏教が廃れることは、とても恐ろしいことでした。

人々の苦しみを目の当たりにし、法然さんは、すべての人が救われる教えを探して、悩みに悩みます。三毒から離れることができないうわたしたちが、いくら修行を積んだとしても、苦をなくすことはむずかしいだろうと感じていたのでした。

絵本にあつたとおり、法然さんは、ほかの宗派のお坊さんに会つたり、たくさんのお経やお経の解説書を五度も読みかえしたりしました。

「お経」は、はじめのころは口で伝えられていたお釈迦さまの教えを、文字に残したものです。どのお経も、いつもお釈迦さまのそばにいた弟子、阿難さんの「如是我聞(わたしはこの

